

## 枕をしたことがない

辻 憲男（文学部教授）

1855年（安政二）、福沢諭吉は20歳で適塾に入門した。前年、長崎で蘭学を修めたが、英才を同輩にねたまれ、酒ばかり飲んで暮らした。大阪へ来てから腸チフスにかかり、危うい命を蘭方医・緒方洪庵（おがたこうあん）に助けられた。それで一念発起し、酒を断って勉学に打ちこんだ。

『福翁自伝』は愉快的な名著である。病中、ざぶとんをくくって枕にしていた。快方に向かった頃、普通の枕をしたいと思ったが、家来がどんなに捜しても見つからない。それで初めて気がついた、「これまで倉屋敷に一年ばかり居たが、ついで枕をしたことがない、というのは時は何時（なんどき）でも構わぬ、ほとんど昼夜の区別はない、日が暮れたからといって寝ようとも思わず、頻りに書を読んでいる、読書にくだびれ眠くなってくれば、机の上に突っぷして眠るか、あるいは床の間の床側（とこふち）を枕にして眠るか」であった。「なるほど枕はないはずだ」。これは諭吉だけでなく、適塾生は大抵みなそんなもので、これ以上しようがないほど猛勉強をしたのである。

幼少時は手先が器用で、着る物に頓着しなかった。兄に“日本一の大金持ちになって、思うさま金を使いたい”と言うと、兄は苦い顔をして“ただ忠孝あるのみ”と唱えた。諭吉は「へーイ」と応じた。…二歳まで育ったのが、天下の米市場のあった大阪堂島。郷里の中津（大分県）に帰藩しても、家中の大阪言葉は抜けなかった。独立自尊の実学精神は、この大阪の水に養われたものであったろうか。



大阪北浜の史跡・適塾。初学者はオランダ語文典を素読した。